

金州城下の作（乃木希典）

山川 草木 転た 荒涼

十里 風 腥し 新 戦場

征馬 前まず 人 語らず

金州 城外 斜陽に 立つ

山川草木轉荒涼 十里風腥新戰場
征馬不前人不語 金州城外立斜陽

解説 この詩は日露戦争の戦場である南山の戦跡を吊らい、山上の戦死者の英霊を慰さめたときのもの。

語釈 ※金州城Ⅱ満州の南端、旅順港の背後の要地。

※転Ⅱいよいよ。ますます、※荒涼Ⅱ荒れはててすさまじいさま。※征馬Ⅱ車馬。のちには戦争に用いる馬の意にも使われるようになった。※不前Ⅱ「前」は「進」と同意。※立斜陽Ⅱ夕日を受けながら馬をとどめる。

通釈 山川草木、（すべて蟬丸のあともなまなましく、）あたり一面、見れば見るほど荒れはててすさまじいありさまである、十里四方の間をに血なまぐさい風が吹いて、この戦争直後の戦場は、実にいたましいかぎりである、わが乗る馬車も進もうとはせず、だれもかれもみんなだまつて口もきかない。自分け今、夕日に照らされて、金州の町はずれで無限の感慨に堪えながら馬をとどめているのである。